

# 先生と東邦大空手部誕生

松濤會理事 浜田純三

先生が亡くなられて、早くも半年が過ぎてしまいました。先生が亡くなられたことは、今更のごとく私共の周囲に、大きな衝撃を与えました。そして、私共は一人々々の胸中に先生がいかに偉大であられたかを改めて知らされていました。

先生を初めて遠く拝したのは、私が中央大学空手道部のヒヨロ／＼の新部員として参加した新潟の夏合宿でした。誰か先輩部員の一人が、広い体育館の片隅の方をかいま見て“あの人があくびの江上という人だ”と教えてくれたように覚えてています。OBの方々が見ておられた古びた写真集中に、先生らしい飛蹴りの姿があつたのをチラツと見て剣のような足だなと思ったものでした。そして、追い突きをしている私の前にも一度立たれて腹を突かされ、一所懸命突いたものでした。いや突いたつもりでした。素腹を突いたのは後にも先にもこの時だけで、拳が効くとか、効かないとかの、気持も余裕も全くなくて、何も解らなくて突いたものでしたが、何んだか柔かくて暖かかった感触だけが、今でもハツキリ残っています。後年、先生にこの話を

しましたら「良く君のことは覚えているヨ、哲学者みたいな面をした奴が口をひん曲げて腹に触ると、こそばゆつくてナ……」と笑つておられました。

当時の空手は所謂“堅い空手”でしたが、その後体を悪くして、しばらく空手から遠のいておりました。ボロ／＼になつた私を見て下宿のおばさんから「空手だけは止めて下さい」と涙ながらに諭されたものでした。又私自身の胸中にも“空手は野蛮なもの”との思いが強くあつたことも事実です。ですから昭和三十二年夏、日本相互銀行の組合事務局から東急空手道場開設に伴つて江上先生の門下生となつてゆく福田君に「野蛮な空手家になるのなら、もう住む世界が違うので会うことも無いナ……」と言つたものでした。

しかし、空手は野蛮なものと考へる私自身やはり空手は忘れられず、昭和三十年頃、下宿が同じだつた同期の漆原君に、夜々公園で型の手ほどきを受けたり、杉並区阿佐ケ谷のアパート管理人をやるようになつてからは庭に巻ワラを立てゝ突いたりしております。此のアパートに東邦大学の平研二君や東忠雄君が入居してきたのが、そもそもの縁となつたわけです。

昭和三十二年の秋、平君、東君等が学校に同好会を作りたいので来て欲しいと言われて、水曜、土曜の午後、習志野迄行つたのですが守屋君、飯生君、小橋君達のほか、中

村修君（剛柔流、医学部）も一緒に稽古しておりました。現在の西船橋駅がまだ無い頃のことで杉並の阿佐ヶ谷から、習志野の大久保迄は随分遠かつたようになります。人数もぼつゝ多くなつて空手部らしい形がとのうに従つて苦惱が始まりました。一つの大学の空手部を、どの上部団体に結び附けるか、又誰を師にお願いするか、私として余りに大きな難題で随分悩みました。平君達といろ／＼討議もしたのですが、何分にも空手界の知識が無いのですから困りました。当時一番名の売れていたのは、日本空手協会でしたから本部の電話番号まで調べたものでした。やはり“寄らば大樹のかげ”的気持が強かつたからです。しかし、常に頭にあつたのは、年長者である自分一つの行動が、東邦大学空手部の将来を決定してしまうという責任の重大さでした。漆原君は高知に帰つており、福田君には「野蛮な空手屋に……」と別れた手前、自分が今更、大学の空手部を……とはなかなか言えなかつたわけです。

そして悩んだ末、一応やはり福田君を呼んでみよう、もし彼が来てくれなかつたら、協会まで行つてみようと決心しました。昭和三十三年春まだ寒い日の午後、アパートの玄関で福田君を見た私は「オー」と言つたきり言葉が出なかつたのです。彼が本当にすつかり変つていたからです。江上先生の門下生として僅か半年で人間的な暖かさを身に付けていたからです。平君、東君達と彼を囲んで三時間近く

く話し、本当の「空手道」を識つたわけです。勿論それからが大変でした。以後学校へは彼が先生の師範代として指導に来てくれましたが、それだけではたりず東急道場へも平君達と随分通いました。肩の力を抜け、腰で突け、腹で突けと理解出来る迄苦労したものでした。江上先生の力学の説明は良く解りましたが、解説しながら爪先で、向脛をコツンとやられるあの痛さは苦しいものでした。

昭和三十三年、佐藤君（現医学部OB会長）が入部し、翌三十四年春「部」に昇格し、鈴木君（現OB会長、習志野）も入部してきました。この夏、先生に出席いただき初めて岡山で合宿を実施して、名実ともに東邦大学の空手道部が誕生した次第です。

先生のお教えを賜りながらの二十有余年は今振り返って思えば、本当に勿体無いばかりの有難い年月であつたと感謝しています。空手部誕生当時、先生の御縁による出会いが無かつたら、現在の全てが皆無であつたろうと思ひます。それだけに、先生のお教えの一つ一つを、もつと／＼大切に自分の血肉と出来るよう稽古しなければならないと決心しています。そして今春から、福田君が再度、私共の指導者として復帰してくれることになつたことは、亡き先生のお導きであろうと信じております。

\*

\*